

特集
まえがき

特集 女性研究者の出産・子育て —研究との両立と葛藤

衣川清子

私の手元に『女性と学問と生活—婦人研究者のライフサイクル』(坂東昌子・野口美智子・新山陽子編, 勁草書房, 1981年11月刊)という本がある。この本が出版された年、私は地方の国立大学を卒業して東京の私立大学の博士前期課程に進学したばかりで、文学の勉強を続けていきたいけれど果たして研究者になれるのだろうか? と不安を抱きながらこの本を手にとった覚えがある。

今回の本誌の特集は、ちょうどこの本と二重写しになる気がして、本棚の奥から引き出してみた。一世代以上が経過したが、状況はどれだけ改善されたのだろうか。たとえばこんな記述がある。「歴史的にみると、現在は女性も家庭をもち、子どもを育てながら、一生の職業として研究をつづけることのできる条件がはるかに切り開かれた時代になってきている。…しかし、…まだ家庭生活にかかわる諸問題が研究を断念する直接・間接の原因となっていることも否定できない。」研究を続けることは家庭を築くのをあきらめることと同義に近かった時代から、今は(実際には問題を抱えつつも)研究と家庭生活を両立させてがんばっている人たちが周囲にいくらかも見つかり、人びとの意識も変わってきている。逆に以前はなかった有期雇用やポストドク制度の普及が研究者の夢に暗い影を落とし、研究者としての将来の見通しを狭め、大学院進学自体をためらわせ、若い人たちが結婚や子どもを持つことから尻ごみするような状況を現出させている。

こうした狭間にあって、今まさに出産・子

育て真っ最中、または近い将来に展望している研究者たちが何を考え、何を望み、模索し、葛藤しているのかを、時にはそれぞれの個人的な事情もまじえて報告していただいた昨年の第21回総合学術研究集会(京都)D-5分科会「科学・技術(学問)をめぐるジェンダー問題」のまとめとして本特集はある。特集論文の3人の著者は同分科会の報告者である。それぞれ、女性研究者のための相談室に勤務した臨床心理士、非常勤講師を経て大学に就職したばかりの保育労働の研究者、海外調査を含む研究活動のペースを落とすことなく子育ても継続中の女性研究者の立場から、自らの体験も踏まえて出産・子育てと研究の両立、パートナーや周囲の人びととの関係、葛藤とその克服の方向性などについて原稿を寄せていただいた。また、博士課程在学中で研究と子育ての両立にとりくむ若い女性研究者にも登場していただいた。パートナーとの共同が重要との指摘は注目されよう。

「女性研究者」「出産・子育て」「研究との両立と葛藤」はそれぞれ容易には解決しない大きな問題をはらんだテーマである。ライフコースの途上でこうした問題に否応なく取り組まざるを得ない研究者(性別問わず)が充実した家庭生活を送りつつ、研究活動を存分に行い、成果を社会に還元できるような多様で広範な運動を創っていかなくてはならない。日本科学者会議は間違いなく常にそうした動きの中心にあるだろう。

(きぬがわ・きよこ: 本誌編集委員,
アメリカ文学)